

## アジア史を世界史でどう教えるか

藤沢総合高校 石橋 功

### はじめに

慣れないことであるが、日常の自分の授業を中心に気づいたことを報告したい。私は高校教員生活も37年になり、今年で退職だが、「誰も戦争を教えてくれなかった」（注1）という本を数年前に読み、今は非常に「反省」している。そこでは著者が、桃色クローバーZというアイドルグループと対談していて、彼女たちが第二次世界大戦のことをほとんど知らないということが報告されていた。その理由として、学校で第二次世界大戦をきちんと習ってきていないという事実が述べられていた。

勤務校の生徒にも確認したところ似たようなものであった。私自身、世界史B（週4時間）とそれに続く世界史研究（週2時間）の授業では第二次世界大戦までの学習展開をしてきた。そのため、世界史研究を履修しない世界史B選択者の四分の三の生徒は第二次世界大戦を学ばない、という結果となっていた。このことに気づき、第二次世界大戦までは必ず世界史Bで進むことにしたのはこの数年である。

こういったケースは私だけでなく神奈川の高校での平均的日常である。なぜ第二次世界大戦までいかないかという、現代まで学ばせる意義をそれほど重視していない、また最初から最後まで指導案が用意されていないというところに原因があるようだ。日常的なところでグローバル化が進み、中国、韓国、アメリカ、フィリピン籍の子どもがいつも在籍する高校でこうした現代までの授業をする意味は大きい。

私の経験では最低限、面白がって韓国へのヘイトスピーチデモに参加する高校生はなくせるということである。閔妃の話と創氏改名と強制連行で韓国での対日感情の悪さを説明した時、高校生からヘイトスピーチデモに面白がって参加したことを告げられた。彼らは韓国に対する日本の関わりの歴史を知らないことから参加したという。授業を受けたことで、もう参加しないことを私に告げた。こういったことは対中国に対してもあてはまるのではないだろうか？

\*注1 「誰も戦争を教えてくれなかった」古市憲寿著（講談社）

### 日本史を教えてみて

今年、十年ぶりに日本史Bを担当して、高校日本史のむずかしさにぶつかった。まず細かい。これは小学校、中学校で日本史を学んでいるのだから詳しくなるのは当然である。神奈川では今年から日本史が必修になっており、すべての生徒が日本史を学ぶこととなった。その説明として、外国の歴史を学ぶ世界史が必修で日本のことを学ぶ日本史が必修でないというのはおかしい、というのがその論拠ということであった。

しかし、これは世界史の内容をわかっていない発言である。日本の世界史はあくまでも日本中心の世界史であり、世界中の歴史を均等に学ぶのでないということがわかっていない。政治家たちが学ばせたがっている「日本史」は中学校で学ぶ日本史である。必修世界史はこうした日本社会に影響を与えた世界の歴史、形を変えた「日本史」であるということを、日本史必修化を叫ぶ人々は知らない。知らない人がカリキュラムを動かすのであるから恐ろしい時代がきたものである。

次に驚いたのは、日本史では「日本」という国は大昔から存在する、ということである。縄文時代の日本、弥生時代の日本というように。だが、今のような「均質」な日本の成立はどう考えても明治以降であり、日本の伝統は江戸時代くらいからである。そして、古代から日本があるというのは古事記・日本書紀を信じなくてはならないということになる。日本という国民国家が成立したのは明治維新以降であり、近世が主権国家日本のはじまりとすると、「日本国」なるものは「日本史」が成立しないとほじまらない存在である。

もう一つの驚きは皇国史観が色濃く残っているということである。1192年源頼朝が征夷大將軍にな

ることで鎌倉幕府が成立、1338年足利尊氏が征夷大將軍になることで室町幕府が成立、1603年徳川家康が征夷大將軍になることで江戸幕府が成立ということは、征夷大將軍に任命する天皇の存在を浮かび上がらせることを強調する内容である。実際は、源頼朝（注2）も徳川家康（注3）もすぐに將軍をやめている。將軍として政治を行った部分は少ないということが歴史的事実である。

\*注2 日本の歴史09「頼朝の天下草創」 山本幸司著

\*注3 日本の歴史15「織豊政権と江戸幕府」 池上裕子著

## アジア的視点で日本史を見る

日本史はナショナルヒストリー中心でアジア史的視点が少なく、グローバルな視点が少ないということである。一番それが見えていて、かつ事実と乖離しているのが、大交易時代（注4）の扱いと「鎖国」である。13世紀のモンゴル帝国によるユーラシア大陸の統一が準備し、15世紀の鄭和の大航海という出来事がきっかけとなりアジアは大交易時代に突入する。それとともに東シナ海には私貿易を行い、場合によっては海賊となる海の民倭寇が活躍しはじめる。倭寇は明確な国境がなく国民意識も共通の言語を持たない時代、日本人とか朝鮮人とか中国人とか決められない。倭寇の中にはポルトガル人もはいていたことは、鉄砲伝来の記録からもわかる。そうした大交易時代に、ヨーロッパが中南米の銀をもってアジア市場にはいつてきたのが大航海時代である。

ヴァスコ＝ダ＝ガマが、インド航路を発見するまでヨーロッパ人が行ったことがない錯覚にとらわれるが、ギリシア商人がインドや中国に行っていたことは歴史的な事実であり、インド、東南アジアではローマ金貨が多く発見されていることはこれを裏付けている。ではその後にヨーロッパ人がなぜアジアに行かなくなったかという、ヨーロッパで金が取れなくなり、アジア市場に來れなくなったからである。時代が下ってコロンブスがアメリカに到達し、今度は中南米の銀を手に入れたヨーロッパ人がそれを持ってアジア市場にやってきたのだ。

ポルトガル人との貿易を日本では「南蛮貿易」という。すると生徒はポルトガルと日本の交易と勘違いする。この後のオランダとの貿易も同じであるが、ヨーロッパ人たちは基本的にアジア物品の中継貿易で巨利を得た。中国の絹、陶磁器を日本に運び、日本から銀を中国に運ぶ貿易は特にもうけが大きかった。南蛮貿易とは形を変えた倭寇の交易であった。これまでの教え方では、倭寇は豊臣秀吉の海賊取締令でいなくなったとされてきた。しかし、倭寇は長崎に來る中国船というふうに変えて続いたのである。唐船と呼ばれた船は、従来中国船としてきたが、シャム船もあれば安南船もある。長崎に來る唐船は倭寇の形を変えたものであるならば、鎖国というものもかなり概念を変える必要がある。

以上のような考え方が出てきているのに、いまの日本史ではどう取り扱われているかという、「近世」のはじまりは「ポルトガル人來航」や「鉄砲伝來」であり、「大交易時代」という言葉は一切出てこない。そこに窺えるのは相変わらずのヨーロッパ中心史観である。倭寇についても、「前期倭寇」は日本人、「後期倭寇」は中国人中心というように記述されている。たしかに鎖国の説明としては「四つの窓」と記述され、長崎と並んで、対馬、琉球、松前が紹介されるようになった。

江戸時代が、鎖国により世界に取り残された、というような旧來の考え方は、軍事面の遅れに焦点を合わせすぎているし、なによりも産業革命後のヨーロッパの経済成長を「大きく」見過ぎてきたとに基づく（注5）。江戸時代の絹と木綿の国産化の成功、国民国家形成の意識を準備した「国学」の發達、資本主義の精神となるような「商道德」の發達、すすんだヨーロッパの学問を吸収する「蘭学」の發達等々、江戸時代は鎖国のせいで遅れた時代であった、とする明治時代の「つくられた歴史」からの脱却の必要がある。

\*注4 大交易時代の概念については、「大航海時代と東南アジア 1450—1680」(The Age of Commerce) アンソニーリード著（法政大学出版会）を用いた。この本の訳を大航海時代と訳するところに日本に問題があることを示している。

\*注5 「イギリス帝国の歴史」秋田茂著（中公新書）p 4 図1世界のGDPの比重の変化をみると、

1820 年においても、イギリスの GDP をインド、中国が凌駕していることがわかる。「停滞するアジア」としたマルクスの指摘は誤ったものであった。

### 世界商品で世界史を見る

近代までの不変の「世界商品」は中国の絹、インドの綿製品である。従って同じように東アジアで珍重された沈香、インドで求められた白檀、アラビアの乳香等の流れを追うことは意味があることである。16 世紀以降はヨーロッパ人のアジア進出を用意したのは彼らの香辛料（注 6）への執着であった。この香辛料の産地をおさえて最初の覇権国家となったのがオランダである（注 7）。

ところが 17 世紀以降世界商品が砂糖、コーヒーそれ以上にインドの綿製品（キャラコ）に変わっていくと、産地をおさえたイギリス、フランスに覇権が移っていく。イギリスとフランスの争いはインドを主におさえた（しかしフランスは 20 世紀までインドにちゃんと拠点を持ち続ける）イギリスが奴隷貿易の中心になって、覇権国家にのし上がっていく。そしてキャラコの「代替商品」をイギリスで作ろうとしたのが産業革命である。さらには中国陶器の代替商品も開発した。フランスの産業革命も中国絹製品の代替商品を作るところからはじまったのであり、19 世紀になってもアジア物産の重要性は世界史的にも大きかった。これゆえにアジアの植民地化が進むのである。

産業革命という言い方が、百年かかった社会変化を革命と呼ぶのはおかしいという指摘があり、「工業化」という表現で十分ではないだろうか。この時代以降、「世界商品」になったのが鉄鉱石と石炭である。鉄鉱石を求めて日本は朝鮮の植民地化を行い、石炭を求めて中国東北部（「満洲」）の植民地化をはかっていく。そして 20 世紀に世界商品の中心になるのが石油である。ABCD 包囲網で日本に対しての石油禁輸が日本に対米参戦を決意させたのは歴史的事実である。アメリカが早い段階でドイツと争ったのは北アフリカのエルアラメインであり、ドイツとソ連の決戦がスターリングラードであったという事実は石油の存在の大きさを我々に教えてくれる。

第一次世界大戦も第二次世界大戦も世界商品の取り合いという観点でみるなら、そのような戦争を起させないためには自由に石油等の世界商品を買える体制が重要である。そのためには、自国の生産者の犠牲をとまなうかもしれないが TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の重要性を世界商品、世界大戦と絡めて教えることが世界史教員のつとめであろう。

\*注 6 「香辛料とキリスト教」石橋功『身のまわりの世界史』神奈川県歴史分科会世界史推進委員会（帝国書院）

\*注 7 「東インド会社」 浅田實著 講談社現代新書

### おわりに

こうした新しい歴史学の見方を、私たち高校教員に提供したのは大阪大学の実践である。大阪大学の桃木教授、秋田教授をはじめとする研究者たちが、夏休みに神奈川の高校の世界史教員とともに同テーマで一緒に授業を行い、最新の歴史研究の成果を高校の教材に注入してくれたのである。最近のテーマを挙げると、「19 世紀アジアをどう教えるか」「18 世紀をどう教えるか」がある。こうした高大連携の試みがあっただけではじめて旧来の歴史教育の刷新が可能となったのである。大学の歴史学研究が教科書に書かれるだけではその研究成果は高校の現場にはおりにこない。その研究成果がどう授業に組み込むかが必要なのである。どんどん更新されてゆく歴史学研究が今後の高校教育にどう位置づくかについては今の時点では想像できない。しかし、たとえ我々にとって都合の悪いような事実が描かれようと、正確な歴史を教えることがなによりも必要である。そのために高校と大学の連携が今後も進むことを期待する次第である。